

【173】

氏 名	今 村 吉 之
	いま むら よし ゆき
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 400 号
学位授与の日付	昭 和 42 年 11 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	リンパ組織の比較組織学的研究—こうもりのリンパ節および リンパ組織—
論文調査委員	(主査) 教 授 堀井 五十雄 教 授 西村 秀雄 教 授 岡本 道雄

論 文 内 容 の 要 旨

堀井およびその共同研究者は、哺乳類リンパ節の比較組織学的研究を行なって、リンパ節の組織学的構造には、かなりの種族特異性があり、動物の進化に伴い、その構造にも分化がみとめられる。構造上の分化とは、従来一般に、リンパ節構造の分化と考えられたものの他に、部位特異性があげられる。

これらの研究の一環として今までに、いえこうもり・きくがしらこうもり・こきくがしらこうもり、についての、リンパ節組織の比較組織学的研究があるが、例数も少なく、かつ、検索リンパ節も頸リンパ節・腋窩リンパ節に止まったので、本報告においては、例数を増す他に、更に検索リンパ節を上記の他、腸間膜根リンパ節・腸骨リンパ節に拡充し、かつ、その他、肝・肺・脾・腎などのリンパ組織を検する他、髄外造血巣の存否をより確実にたしかめるため、組織切片 Giemsa 染色を行なった。検索に供したこうもりは、いえこうもりで、5～6月の候のもの20例である。こうもり類は、腋窩リンパ節がよく発達している。それでも粟粒大のものである。リンパ節検索20例、臓器検索数例で、研究方法は、フォルモール固定、ツエロイジン包埋後6 μ の連続切片として、堀井研究室で行なっている組織 Giemsa 染色法によった。

その結果リンパ節の大きさは、腋窩・腸間膜根が頸部・腸骨、各リンパ節より大きく、一般に被膜は薄く梁材は弱い。しかし皮質が頸部・腋窩に広く、腸間膜根・腸骨に狭く、偽二次小節の発達も全般に良好で、二次小節は成熟型が多く、髄索は腸間膜根・腸骨のリンパ節に太く、単純で、ラッテのリンパ節に類似するもの多く、辺縁洞の広いものは少なかった。また脂肪化の傾向も見られない。腸骨リンパ節では、周囲組織との分化も不良なものが多かった。腋窩・頸部リンパ節では、髄外造血巣の集団が皮質や髄索の各所に認められた。これらから、こうもりのリンパ節は、哺乳類のうち、ラット・ハムスターのリンパ節に近く、リンパ構造の類似性から一群を成している。またリンパ節における髄外造血巣がよく発達していることが著しい特徴をなしているが、これは、こうもり類における骨髓の造血巣の発達が弱いことに対応するものかと思われる。また臓器のリンパ浸潤は少なく、組織も発達の低い方であるが、脾においてのみ

中心動脈の周辺に長円形なリンパ小節がみとめられた。

論文審査の結果の要旨

比較解剖学上からリンパ節をながめると、肉眼解剖的にはリンパ節の分化の進展とともに、リンパ中心の増加と一リンパ中心に現われるリンパ節数の増加がみられ、組織学的にはリンパ節構造の分化として部位特異性と構造の多様化がみられるのである。著者はまずコウモリ類のリンパ節が分化上どのような位置を占めるかを追究したのであるが、その結果はマクロ的にはリンパ中心数も少なく、一リンパ中心に現われるリンパ節数も少なく比較的分化の遅れた群に属し、ミクロ的には構造の分化は比較的低く多様性を示す傾向少なく、髄索は太く単純で、構造上ラット、ハムスター群に属することが明らかとなった。

またリンパ節にみられる骨髓性造血すなわち髄外造血はその主体が顆粒球造血であるが、およそ二つの型に分類できる。

その一つは胎生後期から生後初期にみられるもので髄索に局限し胎生遺残型とも言うべきもので、他の一つは成熟動物にみられるもので皮質二次小節に局限し、しかもそのリンパ芽球部にみられるもので成熟変異型とも言うべきものである。コウモリリンパ節にみられる髄外造血は上記二型ともにあるが、その主力は第一型胎生遺残型に属し、しかもその規模のはなはだおうせいなことと、成熟動物にもみられることにおいて、他動物に比較をみないもので、コウモリ、リンパ節の一大特徴と言い得るものである。

以上著者の研究はリンパ節の比較解剖学に一新知見を加えたものと言うことができる。

本論文は学問的に有益であって医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。